

山崎通郡山宿における岡藩主中川氏の宿泊

清水 邦彦*

要 旨

中川久貞は寛延三年、岡藩主として初めて郡山宿本陣へ宿泊する。参勤交代で岡へ帰藩途中、先々代から続く海路から陸路へと交通手段を変更しての宿泊であった。その背景には、藩祖である中川清秀の菩提寺である梅林寺への参拝を想定できた。また、久貞は清秀が戦死した大岩山にある清秀墓にも参拝し、記念碑を立てていた。これらの行動は、急養子で跡を継いだ久貞が自身の藩主としての正統性を示すためのものであったと考えた。

キーワード

岡藩 中川氏 郡山宿本陣 梅林寺 参勤交代

1. はじめに

平成25年11月、茨木市と大分県竹田市が歴史文化姉妹都市提携をむすんだ。提携理由の一つに、安土・桃山時代に一時、茨木城主となった中川清秀の子孫が竹田市にあった岡藩の藩主として代々続いたという歴史的背景があった。そのため、提携を記念し、筆者が勤務する茨木市立文化財資料館では、第15回企画展「茨木城主中川清秀と中川氏」を開催することになった(清水2014)。

企画展は、茨木・竹田市にのこる史料を中心に、中川清秀の生涯およびその子孫を採り上げることで、両市の歴史的なつながりの紹介を目的とした。その作業の過程で、西国街道に現在ものこる郡山宿本陣の宿帳に、岡藩主中川氏が宿泊した記録があることを知った(註1)。そのため、企画展では両市をつなぐを岡藩の藩祖である中川清秀に求めるだけでなく、江戸時代にも岡藩主中川氏の郡山宿への宿泊という歴史的なつながりがあることを紹介した。ただし、岡藩主中川氏の宿泊は江戸時代に連綿と続くのではなく、寛延三年(1750年)以降であり、宿泊が開始される歴史的背景については、時間不足もあり、展示では触れることが適わなかった。

本稿は、郡山宿本陣における宿泊記録の検討を中心に、企画展でやり残した、岡藩主中川氏の宿泊が開始される

背景を探ることを目的とする。

2. 郡山宿本陣宿帳の検討

(i) 郡山宿本陣と宿帳

郡山宿本陣は、西国街道沿いに位置する本陣である。本陣とは参勤交代の大名の休泊のほか、勅使、院使、幕府役人、門跡寺院の僧侶、神官などが休泊した大旅館である。西国街道は京都から西宮まで続く街道であり、江戸時代には山崎通と呼ばれ、東から山崎、芥川、郡山、瀬川、昆陽の5つの本陣があったことが知られている。現在は残念ながら、郡山以外の本陣はのこっていない。

郡山宿本陣には現存していることもあり、数多くの古文書がのこされている。その代表的なものに宿帳がある。宿帳とは、その本陣に宿泊、休泊した人のリストを指す。ただし、宿帳は全時代にわたる呼称ではなく、郡山宿本陣では以下の宿帳が現存している。

- ①元禄九年から宝永七年までの『御大名御泊帳』
- ②宝永七年から享保十二年までの『御大名御宿帳』
- ③享保六年から寛延三年までの『御宿帳』
- ④寛延三年から宝暦十四年までの『覚帳』
- ⑤宝暦十四年から天明七年までの『御大名様御休泊帳』
- ⑥天明八年から享和三年までの『御大名様御宿帳』
- ⑦天保四年から文久二年までの『御大名様控帳』

*茨木市立文化財資料館

⑧文久二年から明治三年までの『諸侯方御休泊帳』

享和三年から天保三年までの30年間の宿帳が欠けているものの、およそ200年間近く、郡山宿本陣における休泊の状況を知ることができる重要な史料である。また、その欠けた期間についても、宿割帳などから宿泊リストが復原されている(梶・福留2000)。

また、これらの宿帳に記載されている内容も、全て同じではなく、時代とともに変化していく。元禄の頃は休泊の年月日、休泊者名、休泊の別、心附など簡潔な内容であったが、時代が下るにつれて記載内容も詳細になっていく点の特徴である。

(ii) 「初」中川修理大夫御泊

岡藩主中川修理大夫の名が宿帳に初めて見えるのは、上記④の『覚帳』の寛延三年である。そこには、「初て五月廿一日／一、中川修理大夫様 御泊り／銀三枚 式拾人」とある(註2)。

「初て」と記載されていることから、岡藩主中川氏が初めて宿泊したことがうかがえる。また、寛延三年の宿泊であることから、この「中川修理大夫」は8代目岡藩主の中川久貞と考えることができる。

『中川氏御年譜』内の「御年譜第十中川久貞」の寛延三年の記事をみると、

「一、(五月)六日、江戸御発駕、御仮養子酒井三郎助様、十九日、京都御勤、同日、伏見御着、廿二日、同所御勤、山崎通、中国路御通行、芸州宮島、長州赤間ヶ関阿弥陀寺、豊前宇佐へ御参詣」

「一、六月十一日、御帰城」

とある。郡山宿本陣での宿泊は5月21日であることから、参勤交代で江戸から岡へ帰る途中であったことがわかる。

残念ながら、上記の記述のみでは宿泊の背景を探ることは不可能であるが、従来寄らなかった郡山宿本陣に初めて宿泊したという点において、注目すべき記事と言えよう。

(iii) 歴代岡藩主の宿泊

次に、他の岡藩主中川氏の宿泊について、みていく。郡山宿本陣宿帳および『直段双庭付御跡改證文控』にみえる岡藩主中川氏の宿泊をピックアップしたものが、表1である。表1からは、中川久貞が初めて郡山宿本陣に宿泊して以降、岡藩主中川氏は参勤交代時に郡山宿本陣

表1 宿帳からみた岡藩主中川氏の休泊

宿泊年	西暦	月日	宿泊者	休泊
寛延三年午	1750	5月21日	中川修理大夫	泊
宝暦三年酉	1753	3月21日	中川修理大夫	泊
宝暦五年亥	1755	3月21日	中川修理大夫	泊
宝暦六年子	1756	5月6日	中川修理大夫	休
宝暦七年丑	1757	3月21日	中川修理大夫	泊
宝暦九年卯	1759	3月21日	中川修理大夫	泊
宝暦十二年午	1762	4月19日	中川修理大夫	泊
安永六年酉	1777	3月13日	中川修理大夫	泊
天明二年寅	1782	2月21日	中川内膳正	久徳 休
文政四年巳	1821	9月晦日	中川修理大夫	泊
文政十年亥	1827	3月20日	中川修理大夫	泊
天保二年卯	1831	5月24日	中川修理大夫	宿
天保六年未	1835	4月15日	中川修理大夫	泊
天保八年酉	1837	10月18日	中川修理大夫	泊
天保十年亥	1839	10月16日	中川修理大夫	泊
天保十三年卯	1842	6月2日	中川修理大夫	泊
弘化二年巳	1845	3月14日	中川修理大夫	久昭 泊
嘉永六年	1853	3月27日	中川修理大夫	泊

に宿泊する回数が多くなったことが読み取れる。とりわけ、中川久貞は寛延三年以降、江戸と岡の間を14回移動しているが、そのうち8回の移動中に郡山宿本陣へ休泊しており、何らかの意図があったことを示唆している。

次に、郡山宿本陣宿帳における個々の記述について、みていく。

④『覚帳』

・宝暦三年(1753年)

「三月廿一日／一、中川修理大夫様 御泊／銀三枚 廿人 百十八文」

・宝暦五年(1755年)

「三月廿一日／一、中川修理大夫様 御泊／銀三枚 外ニ茨木式人」

・宝暦六年(1756年)

「子五月六日御通り／一、中川修理大夫様 御小休／金百疋被下候」

・宝暦七年(1757年)

「三月廿一日／一、中川修理大夫様 御泊／銀三枚 廿人 百三十文」

・宝暦九年（1759年）

「三月廿一日／一、中川修理大夫様 御泊／銀三枚 廿人」

・宝暦十二年（1762年）

「同（壬四月）十九日／一、中川修理大夫様 御泊り／銀三枚 十八人・式人夕・三人 百廿文」

⑤『御大名様御休泊帳』

・安永六年（1777年）

「安永六年西三月十三日／一、中川修理大夫様 御泊／銀三枚 百三拾六文 廿人・六拾六文 片三人 梅林寺」

・天明二年（1782年）

「二月廿一日／一、中川内膳正様 御休／金式百疋 七百文 めし・同（金）百疋 御殿様御賄料」

⑦『御大名様控帳』

・天保六年（1835年）

「未四月十五日 御国三月晦日立 西宮ニ三日滞留／一、中川修理大夫様 御泊 中二・下一／金式両 旅籠百八十文つゝ、下宿中大拂 御本陣泊廿七人／梅林寺代僧江銀三匁酒肴料 侍ニ錢式百文 御供江百文 うけ持人足江百文つゝ、メ南壺片請取 夫々江相渡ス」

・天保八年（1837年）

「西十月十八日 前日宿割 掛札御出被成候 酒五合かい申候／参一、中川修理大夫様 御泊 中二・下／金式両 夕三十式人 朝三十式人 旅籠式百五十文つゝ、梅林寺下宿釘甚頼申候 下宿中大拂 下宿廿六軒 油紙十二まい 東丁ニ油紙宿四五軒残し置候事 中通し馬廿六疋有之 清介より頼ニ参り申候 朝御触めし太ふれ有之 半時致し一はん二はん三はんにて御出立有之 男手都合五人 女都合三人にてよろしく」

・天保十年（1839年）

「十月十六日 前夕関札紙 宿割共御出／参一、中川修理大夫様 御泊 中二・下一／金式両 梅林寺江メ式朱被下相渡ス 下宿中大拂 夕三十三人せん出はたこ百九十文つゝ、宿割 酒五合かい申候 則梶又江送り申候 男手メ四人 女手メ四人」

・天保十三年（1842年）

「天保十三卯六月二日 前々日室津より御定御觸参ル 茨木村梅林寺江下男ヲ以案内状爲持遣候 ちん錢二百五十文受取／参一、中川修理大夫様 御泊 中二・下一／金式両 夕三十人 朝三十人 梅林寺江南壺片 御酒肴料として壺札候 梅林寺江案内壺人遣ス 此返礼ニ銀壺両被下候 以後ハ此案内人下拙内寄之者遣ス事 道すじは札場より上り 田中江参ル 新兵衛とも同道ニ御座候 宿割役人江酒五合出ス 帳ハ才米重江頼申事 旅籠百九十文つゝ、下宿中大拂 南一片 惣人数メ式百八十六人 男手メ四人 女手メ四人／梅林寺下宿江南一片被遣候ニ付 受取此方より遣ス 中河原村方より御道中并ニ御公儀掛り御役人塩山一学様 右式宿外ニ御臺所御願申上 鯉一尾つゝ、差上被下候 尤御泊と相知れとも中河原村江知らず様相頼被申候 油紙宿本陣近ニ三四軒入用之事」

・弘化二年（1845年）

「同（三月）十四日 前日宿割上下メ六人御出 酒九合出申候 前夕御先觸参候茨木梅林寺下宿取 梅林寺惣中へ御上より南壺片被下 直様伴僧江遣ス受取／参一、中川修理大夫様 御泊 中二・下一／金式両 旅籠三十二人夕朝共 下宿中大拂 壺人ニ付百八拾六文 雇男メ三人 女壺人」

・嘉永六年（1853年）

「同（三月）廿七日前日御宿割上下五人御出 酒七合出ス 前晚御宿割御着有之候ハ、茨木梅林寺へ知らず人足夜分故式人分式百文請取事／参一、中川修理大夫様 御泊 中二・下一／西上刻御着 卯上刻御立／金式両 下宿中大拂 下宿式拾五軒 夕式拾八人 朝式拾八人 内壺人分佛 旅籠式百廿文つゝ、梅林寺宿西丁くら清へ取 来年よりは其心得 東丁之内ニ取事 勤男三人 女三人 米夕壺斗式升 朝八升五合／御殿様御忍ヒにて梅林寺へ御参詣被遊候 御案内ニ下拙参ル 夫より梅林寺御立にて如意寺川より本海道へ出 御下候内御祝儀ニ銀壺両街道中より被下 手前は梅林寺より帰り 其先は出入之者御案内可致申候 梅林寺より手前へ挨拶ニ銀壺両申請候 梅林寺迄人足壺人百拾文 夜分は式百廿文壺人増」 新しい時期の宿帳の記載事項には「一」の前に「参」

が記載されており、これは参勤交代で江戸へ向かう道中の休泊であることがうかがえる。記載されていない古い時期のものについても、その多くが参勤交代時における休泊であることが他の史料から裏付けることができる。

また、梅林寺が多く登場することが注目される。内容は、梅林寺への参詣や下宿や酒肴料などである。つまり、郡山宿本陣への岡藩主中川氏の宿泊は梅林寺との密接な関係がその背景にあったと想定される。

梅林寺は岡藩主中川氏とのつながりが深く、藩祖である中川清秀の菩提寺である。中川清秀は天正八年（1580年）、『中川氏御年譜』に「一、九月十日、茨木梅林寺へ高三十石永代御寄附」とあるように、梅林寺へ三十石の寄進をしており、手厚く保護していた。中川清秀が賤ヶ岳の戦いで戦死した際には、当時の梅林寺の住職である是頓和尚が賤ヶ岳におもむいて、遺髪を持ち帰り、供養したと伝わっている^(註3)。

(iv) 郡山宿本陣宿泊の目的

上記の検討を踏まえると、参勤交代の道中における郡山宿本陣での宿泊もしくは休憩は、中川清秀の墓参りが目的であったことが想定される。宿帳に梅林寺の記載がない古い時期の宿泊もおそらく、同様の目的であったであろう。

3. 参勤交代時の交通路の検討

中川久貞による郡山宿本陣への宿泊を別の角度から検討してみたい。『中川氏御年譜』をもとに、中川久貞の参勤交代時における岡と上方の間の交通路の選択について、まとめたのが表2である。

中川久貞は延享元年（1744年）から安永六年（1777年）までに、往路・復路併せて20回の移動をしている。詳細をみていくと、最初の延享元年は室から三佐まで船で移動しており、その後、寛延二年までの5回も大坂と三佐の間を船で移動している。初めて郡山宿本陣に宿泊した寛延三年の移動時には、海路ではなく、「山崎通・中国路御通行、芸州宮島、長州赤間ヶ関阿弥陀寺、豊前宇佐へ御参詣」とあるように、各所を巡りながら陸路で岡まで帰っている。

その後は宝暦四年（1754年）に大坂と三佐の間を船で移動した以外は、全て陸路を採用している。そのため、

寛延三年を画期に、ほぼ陸路へと変化したことを読み取れる。

陸路の多くは「中国路」のみの記述が多いなか、「山崎通」および「中国路」と併記されているのが、寛延三年、宝暦五・六・七年の計4回ある。また、安永六年は「山崎通」の記載のみである。これら5回の移動はいずれも宿帳から郡山宿本陣での宿泊

表2 中川久貞が採った交通路

移動年	交通路
延享元年	室 - (船) - 三佐
延享二年	三佐 - (船) - 大坂
延享三年	大坂 - (船) - 三佐
延享四年	三佐 - (船) - 大坂
延享五年	大坂 - (船) - 三佐
寛延二年	三佐 - (船) - 大坂
寛延三年	山崎通・中国路
寛延四年	中国路
宝暦二年	中国路
宝暦三年	中国路
宝暦四年	大坂 - (船) - 三佐
宝暦五年	中国路・山崎通
宝暦六年	山崎通・中国路
宝暦七年	中国路・山崎通
宝暦八年	中国路
宝暦九年	中国路
宝暦十二年	中国路
宝暦十四年	中国路
安永五年	中国路
安永六年	山崎通

を確認することができることから、『中川氏御年譜』で「山崎通」と記載された移動では必ず郡山宿本陣に宿泊していたことが言える。一方で、「中国路」のみの記述は計7回あるが、宝暦三・九・十二年の移動時については宿帳から郡山宿本陣への宿泊を確認することができる。そのため、郡山宿本陣での宿泊と「山崎通」の記載は必ずしも一致するわけではないが、「山崎通」の記載と郡山宿本陣への宿泊には一定の相関関係があるとみることができる。

次に、中川久貞以前の参勤交代についても確認しておく。

7代目の久慶は跡を継いだ翌年に亡くなったため、参勤交代をしていない。

6代目の久忠は正徳四年（1714年）から寛保二年（1742年）の間、参勤交代で計27回の移動をしている。享保二年（1717年）に中国路を通った以外は船を利用している。海路については、正徳五年（1715年）の参勤時に三佐から室を利用した以外は、三佐と大坂の間を船で移動している。

5代目の久通は若殿であった天和三年（1683年）から元禄八年（1695年）の間、計12回の移動をしており、

すべて海路を利用している。藩主となって以降、宝永四年（1707年）までに、計12回の移動をしており、最初の5回は海路、元禄十四年（1701年）以降は「中国路」と記載されており、陸路を採用している。

以上のように、藩主によって交通路は変化することを確認できる。中川久貞が郡山宿本陣に宿泊する寛延三年以前は、久貞の前々代の久忠から海路による交通が続いており、寛延三年以降の陸路の採用は大きな変化と評価できよう。

4. 大岩山・中川清秀墓への参拝

中川清秀には梅林寺のほかにも、もう一つの墓がある。賤ヶ岳の戦いで中川清秀が戦死した大岩山に作られた墓である。この墓については、『中川氏御年譜』の天和二年（1682年）に「一、（四月）二十日、賤箇嶽御石碑改建 御碑文清秀公御譜ニ載ス」とあり、元々あった墓石を4代目岡藩主であった中川久恒が清秀の没後100年の命日に改修したことがうかがえる。

史料からみえる岡藩主中川氏による大岩山の中川清秀墓への参拝は宝暦十二年（1762年）、中川久貞によるものである。『中川氏御年譜』には「一、閏四月朔日、江戸御発駕、木曾路御通行、尤此節御朱印御持セ、十四日、江州木ノ本御着、志津箇嶽墓所御参詣、此節ノ御詩作」とあり、中川久貞が参拝したことを確認できる。大岩山には、明和四年（1767年）「十月八日、先年御詩作ノ石碑、志津箇嶽御墓所へ御建立」と『中川氏御年譜』に記述された石碑が残されている（写真1）。そこには、一部欠損しているが、『中川氏御年譜』に記されているとおり、「宝暦十二年閏四月将藩掃取路岐岨十四日謁志津嶽／先君莊嶽公之墓有感往事因恭賦五言一律刻石以述懐云／昔日屯軍地慨然憶指揮壘虚山鳥過碑湿岫雲帰登陟攀空翠躡躡对落暉功名名著竹帛千載欽英威／豊後州岡城主中川修理大夫源久貞頓首拜／男久徳謹書」と刻まれていることから、『中川氏御年譜』の記述を裏付けることができる。

5. 中川久貞の郡山宿本陣宿泊の背景

①参勤交代時における上方と岡の交通



写真1 大岩山の中川久貞記念碑

路を陸路への変更および郡山宿本陣への宿泊（おそらく、梅林寺にある中川清秀墓の参拝）、②大岩山にある中川清秀墓の参拝の両者ともが、中川久貞によるものである点は偶然とは考えにくい。両者の行動には何らかの必然性があったと考えるべきであろう。

この点について、岡藩主中川氏の系図（図1）から若干の検討をおこなっておきたい。藩祖である中川清秀の血筋は6代藩主中川久忠で途切れ、7代目久慶、8代目久貞は養子である。久慶は岡藩主を継いだ寛保二年（1742年）の翌年に死去し、久貞は急養子として迎えられている。

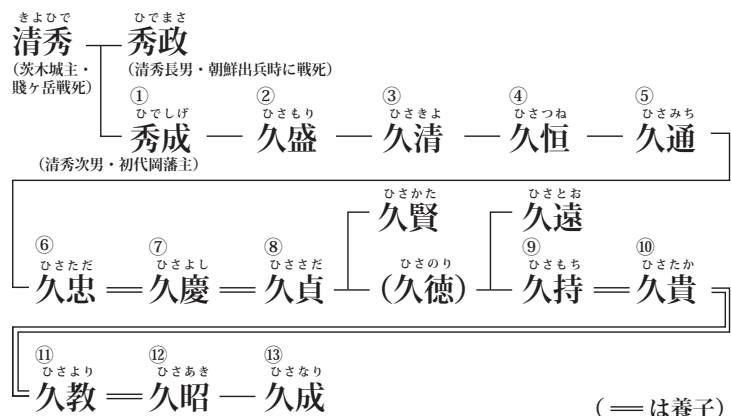


図1 歴代岡藩主と中川氏略系図

以上のことを踏まえると、中川久貞は清秀の血筋を引いていない、実質的にはほぼ初めての藩主となる。そのため、自らの藩主としての正統性を示すために、藩祖である中川清秀墓の参拝を始めたと考えすることはできないだろうか。

6. おわりに

検討結果をまとめることで、本稿を終えることにしたい。『郡山宿本陣宿帳』にみえる岡藩主中川氏の宿泊記事、『中川氏御年譜』を主な検討史料とし、八代目岡藩主中川久貞が郡山宿本陣に宿泊した背景について考察した。その結果、郡山宿本陣での宿泊は中川清秀の菩提寺である梅林寺への参拝が主な目的であったと考えた。また、中川久貞は大岩山にある中川清秀墓にも参拝しており、記念碑を残していた。二つの中川清秀墓への参拝の背景は、中川久貞が自身の岡藩主としての正統性を示すためであったと想定した。ただし、この想定については当時の岡藩藩政の検討などをおこなうことによって、検証していく必要があると考える。稿をあらためて検討することを期して、ひとまず本稿をおえることにしたい。

【註】

- 1) 梶洗氏（郡山宿本陣 17 代当主）のご教示による。
- 2) 本文中における史料の引用については、改行箇所を「／」、並列箇所を「・」に置き換えた。
- 3) 梅林寺縁起による。

参考文献（五十音順）

- 入江康太 2010 「中川氏御年譜—成立背景と史料としての可能性—」『中川氏御年譜とその時代』竹田市立歴史資料館
- 梶洗・福留照尚 2000 『山崎通郡山宿本陣宿帳』向陽書房
- 北村清士 1969 『中川史料集』新人物往来社
- 清水邦彦 2014 『茨木城主中川清秀と中川氏』第 15 回企画展パンフレット 茨木市立文化財資料館
- 竹田市教育委員会 2007 『中川氏御年譜』